

## 「神統譜から国生み神話」を通して

### 様式論から 高橋 六二

天地初発の状態を、『古事記』は「国稚く浮きし脂のごとくして、くらげなす漂へる」と言い替えている。この、国初をワカシと捉えるのは、『出雲国風土記』意宇郡の条の八束水臣津野命の詔りに、「八雲立つ出雲の国は、狭布の稚国なるかも。初国小さく作らせり。かれ、作り縫はな」と見られる。しかもここに「初国」ともあるのは注目に価する。神武天皇を「始馭天下之天皇」といい(記)、崇神天皇を「所知初国之御真木天皇」(記)、「御肇国天皇」(紀)、「初国所知美麻貴天皇」(常陸国風土記、香島郡)という。つまり、天皇は「初国」「稚国」の体現者だということになる。換言すると、そこには神話を様式的に歴史化しようとする意図が見られる。

岐美二神の聖婚は、天沼矛・天浮橋・天之御柱・八尋殿という呪具・聖所に関わって進められる。

このうち、まず天沼矛は、鎮魂祭に御巫が宇氣槽を撞く杵(儀式)と同様の呪義があると考えられる。だが、古典はむしろ矛を治国の聖具として語る場合が多い。「平国時所杖之広矛」(神代紀、下)、「比比羅木之八尋矛」(景行記)はそれである。前掲の国引きの話は意宇社に「御杖衝立」てて終わる。そこには聖婚・国生み・治国が一つのこととして語られている。そうした矛が神格化すると「穗已都久命」(姓氏録、阿曇犬養連の祖)、「天御杵命」(同、服部連の祖)とな

り、「杵衝神社」(延喜式、陸奥・甲斐)も祀られてくる。

天浮橋は、天降る時の施設として語られる。天忍穗耳命・天津日子番能邇邇芸命の場合にそれは明らかである。しかも、天降りには国寛ぎ・聖婚を前提としてなされている。橋は此岸と彼岸とを結ぶものではあるが、ここでは、そうした通行手段としての実体を考えているのではなさそうである。つまり、そこを通過することによって神性あるいは靈力が具備する、そういう空間として観念されているのだろう。この場合の天浮橋は、意義的には八尋殿につながるはずのものである。

天之御柱は「天之御中主神」「国之常立神」の反復表現であって、幻想しているものは同じであろう。それは竜田風神祭の祝詞に天乃御柱乃命・国乃御柱乃命の悟しによって宮柱を定めたところと同様、斎柱(大殿祭祀詞)にはかならない。神靈の依り代は同時に神靈そのものでもある。八尋殿が天之御柱とともに、結婚から出産に至る過程を時間的・空間的に様式化したものだということは、別に述べたことがある。

こうして、二神の聖婚によって大八島国が生み成される。そしてこれは、八十島祭との関連で説くのが有力である。ただ、この祭儀の本義は、説かれるような大八洲之靈をではなく、初国の靈魂を天皇に付着せしめることにあるのではなかったか。

国生み神話を様式論の立場から考えてみると、その表現には意識的な反復が目立つ。国の生成を説くものだから、それを神婚という行為で述べるのは当然なことである。しかしそれは国生み神話にのみ特有の表現をとるのではなく、神婚を説く場合には常に一つの型があるのである。その型を様式だと言い替えてしまおうとつまらない立

論になるが、国生み神話は神婚という様式をとることによって、王権の生成を説こうとしていることが指摘できる。

## 「神統譜から国生み神話」を通して

### 制度論から 吳 哲男

「古事記」劈頭は天地開闢から国(神)生み神話へと展開されるが、このような「始まり」は言うまでもなく古代王権の制度的確立という「終り」(結果)を媒介にして可能となったものである。換言すれば、王権の確立が時間的に過去に遡って始源の世界までも秩序立ったものとして見通す論理を要請したということである。それは、王権の根源という現実にはありもしないものを現実に優越させる論理であるという意味で一つの「制度」といえる。

「記」は、国生み神話からイザナギとイザナミの未完成に終わった「国作り」までの展開を、「成る」↓「生む」↓「作る」の順で叙述している。この点に関連して本居宣長は「邦流と云言に三の別あり、一には、無りし物の生り出るを云、人の産生を云も是なり、神の成坐と云は其の意なり、二には、此物のかはりて彼物に変化を云(略)、三には、作事の成終るを云、国難成とある、成の類なり」(記伝三之巻)とあって、「成る」「生む」「作る」を同一範疇に属するものと考えている。この宣長説を踏まえながら丸山真男は、にもかかわらず「生む」「作る」がより強く「成る」へ親和してゆく、「成る」発想の優位こそ日本の歴史意識・国家意識にとって重要であると述べている。(『歴史意識の「古層」』)

しかし、丸山説の前提には「成る」と「作る」は対立する概念で、なかんずく、明確な主体の存在する「作る」論理こそ西欧及び西欧国家に固有のものであるという目的論的な思考がある。ここでは丸山真男のヘーゲル的な史観を排すると、逆に宣長が「成る」ものの中に「作る」を見、「作る」ものの中に「成る」ものを見出し、この視点が重要になってくる。

すると、「成る」は「作る」と対立する概念ではなく、また「成る」ものが歴史の古層にあって後に「作る」が附加されるのである。逆に古代王権の秩序の確立——文脈に即していうと「国作り」——を前提として、「誰が」国を「作った」か、「誰が」人を「作った」か、「誰が」神を「作った」かと問うていって、論理の行きつくところに見出されたものが「成る」である。すなわち、「誰が」作ったかわからないもの||「自然が作ったもの」のことを「成る」といった。これを時間軸に置きかえれば、始源の神々が「成る」とされるのは論理上当然であろう。

これを文学の問題としていえば、「記」上巻を構成する上で、文学的な構成の限界点に見出されたものが「成る」論理であったといってもよい。

### 「神統譜から国生み神話」を通して

#### 〈発表・討議〉その総括

古代文学を研究対象とする場合、〈発生〉を問うことは究極的な問題であると共に、古代文学研究の基盤にあるものとして意識し続